

---

# 例えば猛進する猪のように

ぐろわ姉妹

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

例えば猛進する猪のように

### 【Nコード】

N9309C

### 【作者名】

ぐろわ姉妹

### 【あらすじ】

ビッキーが隣の部屋に引っ越してきたからこそ、私の意識は変わったのだ。ハイヒールがコツコツコツ。あなたにも彼女の素敵な足音が聞こえたかしら？【携帯改行有】

例えば猛進する猪のように

(前書き)

これは劇場『すぽっと』というお題企画から、お題タイトルを頂いて書いた作品です。

表紙他にリンクがありますので、他の方の作品はそちらからどうぞ。

例えば猛進する猪のように

私の住処はダウンタウンの安アパートだ。  
なんの変哲もない。ただ古く、汚いだけが取り得のアパート。  
それでも人生は素晴らしさに満ちているから不思議である。

こんな場所でも人は輝くのだと知ったのは、3ヶ月前から隣の部屋に住み始めたビッキーのおかげ。

昨夜だってビッキーは、年相応にぼつちやりとした体を揺らして言った。

「這い上がるからこそ美しくなる。そうでしょ？」

自信の溢れた唇に真つ赤なルーージュを乗せ、女の私をもうっとりさせるくらいの微笑を彼女は見せてくれる。

ビッキーは遅しく美しい。

美しさは遅しさへのご褒美なのだとさえ思えるほどに。

彼女は日々、娘のために働いている。

離婚した夫のもとにいるまだ9才のかわいい娘。その娘に会うためには、元夫が不当に取り決めた資格が必要なのだという。手取り月収1200ドル以上であること、そしてその給料日に娘の口座へ900ドル送金すること。

翌日夫は口座の金額を確認してビッキーを自宅の玄関先まで呼びつけると、彼女の持ってきた給料明細を角から角までそれこそ難癖の取っ掛かりを探すようにして眺め回し手取り月収を確認する。

残った金額から家賃も光熱費も引かれれば、彼女の実際の生活費はゼロなど通り越しすっかりマイナスになっていくはずだ。

無学なうえ若くもないビッキーには決して稼げるわけがない。そ

例えば猛進する猪のように

れを解つて要求してくるなんて。

「そんなの嫌がらせ以外の何者でもないじゃない」と、私は彼女に抗議した。

でもビツキーは笑うのだ。

「たとえ不当であろうとそれであの子に会えるのなら、私はきつちり支払つてみせるわ」と。

そして本当に、毎月その額をどこからか弾きだしてくる。

……私はその出どころを聞かなかった。

聞けるわけがなかった。

昼間なら彼女が角のレストランでウエイトレスをしてるのは知っている。

私が行けば、こっそりとフライドポテトを多くしてくれる。私もそつと心ばかりのチップをはずむ。

ウエイトレスの仕事が終われば一度家へと戻り、着飾った彼女はその後どこへ行くのだろう。

先々週の夜遅く、数ブロック先の暗がりで見かけた街娼が肥えらかな彼女のシルエットと似ていたなんて、気にしないべきだろう。それでも私の胸はひどく痛んだ。

「ビツキーは遅しく……美しい……」

独り、部屋で呟く自分を、今日も私は嫌ってしまふ。

比べて私はなんて甘ちゃんなんだろう。

そこそこの学もありそれなりの仕事にも就いたくせに、私という女は、ぬるま湯につかったまま不満ばかりを感じてる。

社会に出て2年半、キャリアアップのためと称した転職先で、この数ヶ月間私がしていたことは実に下らなかつた。

職場の白人上司にこき使われたと愚痴り、同僚からはセクハラまがいの嫌味を言われたと愚痴り、それを人種差別に違いないと叫び、たとえ実際そうだとしても、裁判に持ち込めるほどには決定的な証拠も金もないのだからと不貞腐れる。

例えば猛進する猪のように

決して脱ぐことはできない有色の肌を嘆き、神を恨み、国を蔑み、拳句そんな愚痴ばかり並べていたら恋人には愛想をつかさね大ゲンカをしてしまった。

売り言葉に買い言葉、謝る機会も失って、一人で寝るベッドは広くて寂しいなどと言っている。

ある朝、それも夜明け頃、ビッキーは左目を腫らして帰ってきた事がある。

彼女が出かける時、帰ってくる時、廊下で軽快に鳴り響くヒールの音が大好きで、私はいつものようにその足音に耳を澄ましていた。その日は普段と違いヒールが不自然なリズムを刻んでいたのも、おかしいと思った私はベッドから這い出しガウンを羽織い、そつと玄関のドアを開けた。

「ビッキー……どうしたのその顔……！」

彼女の金色でゴージャスだったハイヒールは、右足だけが折れていた。

ビッキーは潔いほどに鼻を鳴らすと、ぶらぶらと未練がましく踵についているヒールを引きちぎり、階段下へと放り棄てた。

螺旋階段の中心をずっと下まで落ちていったヒールが、しばらくして寒々しい音をホールに響かせる。

「私はね、男なんかいなくなつていいの。ただ私たちをこうして侮辱する者がいる限り、どこまでも生きてやろうと思うのよ。……いくらだつて強くなる。いくらだつて笑ってみせるわ……！」

そう言つて彼女は大柄な顔のわりに小さな目を、長いまつ毛を蓄えたそれを吊りあげ、私を見据えた。

強く見つめてくるビッキーの目は、就寝前に見ていたネイチャーチャンネルの、猛ったワイルドボアによく似ていた。

農家の嫌われ者と言われるワイルドボア、しかし普段はとても温

例えば猛進する猪のように

厚で人を襲う事などないという。

彼らを害獣として捕まえ棒切れで叩く農場主の足元で、決して死ぬまいと悲鳴を上げて暴れまわるワイルドボア。

私はなぜだかその凜とした命の輝きを、ビツキーの瞳から感じ取っていた。

大きな身体に似合わず細い脚をして、高いヒールを履いて、滑稽なほど高慢に足音を響かせ、醜いと罵られようと鼻を鳴らして笑い飛ばす。

そのワイルドボアが、深い鼻息を鳴らして猛っていた。

自慢げにツンと上を向いているはずの鼻が、痛みを堪える彼女の姿勢で下を向く。

姿勢こそ弱々しいものの、我が道を邪魔する者はみな薙ぎ倒さんとはかりに膨れ上がったオーラは、争いの場に遭遇した事のない私にでさえ容易に感じ取ることができた。

その感覚は、彼女の体内に燃え盛る真紅の炎を見た思いだった。

見た者の魂さえ焼きつくすような生ける炎。

……私の背筋を何かが走り有色の肌を総毛だたせていった。

彼らが猛進するとしたら、それは四方を囲まれ逃げ場を失った時なのだ。

どこを向いても敵しかおらず、敵の間を抉じ開けて飛び出すしか道はない。

気を奮い起こす咆哮を上げヒールを鳴らして駆けるワイルドボアを、誰が止めることができようか。

あなたの左目を殴ったのは誰？

あなたの背を蹴ったのは誰？

先月も起きた街娼殺害事件が頭をかすめる。

彼女の顔は左目どころか左半分が腫れてきていて、私は恐ろしさのあまり震える手で彼女の頬に触れた。口内から溢れたらしい血は、口の周りで固まって、真っ赤なルージュにまぎれ化粧崩れのふりをしている。見れば、着ている少し卑猥なワンピースも引きちぎれて

例えば猛進する猪のように

安物のコートには血と泥がついていた。

私はためらいながらも無言で彼女をそっと抱きしめ、背についた泥の足跡を彼女に痛くないよう軽く払う。

そんな払い方では消えようもしない卑怯者の足跡が、疎ましく、悔しくて仕方ない。

「……ビッキー……」

無事でよかった……そう唇を突いて出そうになった時、涙の滲むほど猛っていた目を無理に細め、ビッキーは誇りを失わない笑みを作った。

そして指先に引っ掛けた踵のないハイヒールを、私の目の前でぶらつかせる。

「……高かったのよ？ 買ったばあっかり。あんた、男の顔にヒールをめり込ませたことある？」

「……」

なんて美しい笑顔だったろうか。正直に言えば、その笑顔がジャンヌ・ダルクにさえ見えた。

顔を腫らせた中年女性を表現するのには、たしかに美しすぎたかもしれない。でも、それでも、あの時私は確かにビッキーがそれほど美しく思えたのだ。そして私はそんな彼女の強さをひとかけらでもいいからこの身に宿したいと、心から願っていた。

「まだね。……練習した方がいいかしら」

「ばかね、練習なんか要らないわよ！ ただ、思い切り、踏みつければ、上出来。一番高価だったヒールになさい？ 爽快感が違うもの」

そう言って笑ったビッキーがぴたりを声をとめ、すぐさま天を仰いで首を振る。

「そうよ、一番高かったんだわ！」

ビッキーは螺旋階段から階下のホールを覗き込むと、左足にヒールを履いたまま、もう片方は手に引っ掛けたまま、不恰好に階段を降りていった。

例えば猛進する猪のように

私はその背に声をかける。

「戻ってきたらうちに寄って！ その顔冷やしてあげる」

「ああん、いい子！ 悪いわねえ！ これ以上バケモノになったら、アタシだって仕事になんないのよ！ レストランの看板娘は顔が命！」

威勢のいい笑い声を上げながら、なおも無駄口を叩きビツキーが階段を降りていく。小さくなっていく彼女は手摺りから覗き込む私を何度も見上げ、その度に声のボリュームを高くした。あまりの騒がしさに階下から顔を出した男が叫ぶ。

「うるせえ！ 何時だと思ってたんだ、このメスブタババア！！」

「あーら、おはようウィンナー坊や！ 教えましょうか、女はみんなメスブタなの！ あんたもブタから生まれたウィンナー、ウィンナーにできることが何だか知ってる？ せいぜい柔らかいパンの間でおねねすることよ。さあさあ早く帰って、とつととベッドにお戻り。野生に帰ったブタが、あんたを襲いに行く前にね！」

私は泣きそうになる気持ちを抑えながら、彼女が気丈に振舞う限りは私もそうしていようと思ひ直した。

かっこいい女であることは簡単じゃない。

ただヒールを履いて歩いていけばいいというものではないのだ。

固い誇りを持った者を知る方法がひとつだけあるとしたら、それは恐らく足音の美しさである。

およそ生半可な者が敵うはずもない美しい足音には、凜とした人生が宿る。

街に行くワイルドボアの足音はみな、優雅で強く、美しい。

誰かの 何かのせいにはしない、そんな強さが私にも手に入るだろうか。

自分を不幸だと決めつけない逞しさが、私にも手に入るだろうか。

今しがた奮発して買ったこのヒールを履いて、私は明日入社する。例えば猛進する彼らのように駆けなければならぬ時が来たとし

例えば猛進する猪のように

ても、私がこの足からヒールを脱ぐことは決してないだろう。  
むしろそのときこそ、待ってましたとばかりに踵を打ちつけ、華麗に窮地を切り抜けるつもりだ。

例えその戦いが他人の目には醜く映ったとしても、私は気高いプライドをしっかりと持って戦い抜いてやる。

だってこのツンとしたヒールには、そういう生き方が良く似合うから。

そうでしょう？ ビッキー？

( e n d )

(後書き)

お付き合い頂きありがとうございました。

この場をお借りして、小説のインスピレーションを下さった劇場『すばと』にも感謝致します。

例えば猛進する猪のように

例えば猛進する猪のように

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。

出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9309c/>

---

例えば猛進する猪のように

2008年8月29日19時35分発行